

巨乳大家族催眠

男爵平野

画：スカイハウス

巨乳大家族催眠



著：男爵平野

画：スカイハウス
原作：ルネ

PB オトナ文庫



「ん……あむ、れる、ちゅっ」
 めめるような顔と温かき、そして柔らかな感触が下身から広がってくる。
 「はっ、ん、むっ……ん、むっ」
 先端がなま暖かい粘膜に包まれ、ちろちろと蒸め上げられる。そのあたりで、ゆっくりと意識が覚醒し始める。
 まだぼんやりとした視界を下半身に向けると、眼鏡をかけた美女が僕のペニスに奉仕をしてくれているのが映る。
 「……おはよう、美冬さん」
 「ちゅっ、れろ……はい、おはよう、雄一くん」
 朝の陽射しに相応しい、柔らかな笑顔で僕に挨拶を返す。そこだけ切り取れば、ごく一般的な朝の風景だ。
 しかし、はだけた美冬さんの巨乳には僕のペニスがみっちり挿入されているし、姿を覗かせている雄頭は先走りと唾液ででたらと濡れ光っている。

第一章 問宮家の性活

目次
 第一章 問宮家の性活——5
 第二章 立ち込める不穏——73
 第三章 ご近所付き合い——157
 第四章 巨乳大家族——238



父親の再婚により継母となった美冬、その娘で継母となった夏希、秋葉と暮らす子爵校生。当初は馴染まなかった彼女たちを、通帳で入手した情報ペナライトで「家族ならばセックスするのは当然」と暗示をかけることに成功。それを機に美冬は妹で医師の春河と対峙するが、ボリボリで面談に成功し自分と春河とは恋人同士であると暗示をかける。以降、四人の美しく巨乳の家族たちと毎日のように身体を重ね、平穏な日々を送っていた。

美冬や ちゅいつい
 問宮 雄一



まみや みゆゆ
 問宮 美冬
 B:94 W:68 H:89
 第一の義母。噂ながらも驚いた顔立ちに際やかな微笑をたたえる優しい女性。家事全般が得意な良妻賢母タイプ。

まみや なつき
 問宮 夏希
 B:89 W:66 H:88
 美冬の長女で女子校生。わがままタイプのリア充美少女だが、義母により第一に教養られ、従順でかわいらしい性格となった。



ひのほら はるか
 日野原 春河
 B:90 W:58 H:88
 美冬の妹で精神科医。義母により第一の恋人となった。キャリア志向のため心が強いが、義母になれば心強いタイプ。

まみや 秋葉は
 問宮 秋葉
 B:90 W:58 H:88
 美冬の次女で女子校生。引つぱり美少女で性格ぼつたが義母に順従性が出て、すんで一性に情な相手をするほどに。



なみの 弥千代
 なるみ やちよ
 B:98 W:58 H:89
 問宮家の隣に住む人妻。控えめな印象だが芯の強い一面がある。夜の誘いを断って以来、夫から求められなくなりセックスレス状態となってしまった。



さくら ななえ
 おうぞら ななえ
 B:90 W:60 H:88
 問宮家のはず向かいに住む人妻。嗜好きのお蔵がタイプ。それが買いたのか夫に浮気されるようになり、セックス面では寂しい思いもしている。

ついで 渡子
 おかべ りこ
 B:88 W:55 H:82
 問宮家のある地区の町内会長を務める人妻。夫はエリート官僚で、自身もキャリアウーマンで、酒民思想が強い。夫婦ともに仕事優先でセックスレス状態。



さくら ななえ
 おうぞら ななえ
 B:90 W:60 H:88
 問宮家のはず向かいに住む人妻。嗜好きのお蔵がタイプ。それが買いたのか夫に浮気されるようになり、セックス面では寂しい思いもしている。

ついで 渡子
 おかべ りこ
 B:88 W:55 H:82
 問宮家のある地区の町内会長を務める人妻。夫はエリート官僚で、自身もキャリアウーマンで、酒民思想が強い。夫婦ともに仕事優先でセックスレス状態。

僕のくだらない冗談に、それでも美冬さんはまんざらでもない表情で笑う。そんな美冬の眉を持つて、くるりと反転させる。

「美冬さん、四つん這いになって、後ろから入れたい」

「あつ……この体勢はちょっと恥ずかしいわね。私の身体、濡れてない？」

「大丈夫。美冬さんの身体は綺麗ですよ。ほら、僕のチンポもこんなになっているのが分かるでしょう？」

最近食べ過ぎを気にしているわりには、美冬さんの身体は完璧が取れている。大きな胸に、くびれた腰。そしてむっちりとしたお尻。今からこの身体を好きなように貪れるというだけで、股間がびくりと反応してしまう。それをお尻に擦りつけると、美冬さんは熱っぽい吐息を漏らす。

手早く自分も全裸になり、後ろから美冬さんのオマンコに指先を定める。先端が触れると、くちゅりと濡れた感触が伝えてくれる。

「んっ……」

「美冬さん、入れますよ」

「あつ、ううううっ！」

美冬さんの中にゆっくりと侵入する。何度も味わった隙間が、今度も嬉しそうに縮みついて腰が吸いついてくる。熱烈な歓迎を受けながら、根本まで埋め込む。

「くっ……はっ」

「全部入りましたよ。美冬さん、気持ちいいですか？」

声を出す余裕もないのか、美冬さんの後頭部がこくくと上下する。その反応に気をよくして、抽挿を開始する。

「あつ、んっ、ああつ、ふっ、雄一くん、出したばかりなのに……寒い、ああつ！」

「美冬さんの中ももうそろそろ気持ちいいですよ。美冬さんのオマンコ、すっかり僕のチンポの形になっちゃいましたね」

「やあつ、恥ずかしい。あんっ、んっ！」

羞恥から身体をくねらせるが、それがさらに中の締め付けを強くする。まさしく僕のペニスでこなれたオマンコが、嬉しそうにちゅうちゅうと吸いついてくる。

亀頭と卒で美冬さんの中を味わいながら、腰の動きを速める。

「あくっ、あつ、あつ、奥に、奥に来るんですか？」

「僕の、なんですか？ なにが奥に来るんですか？」

「あつ、あつ、意地悪……今日の雄一くんは意地悪だわ……あつ！」

わざとピストンを止めて、奥をこねるような動きに変える。じんわりと一番奥を刺さってきた美冬さんがごしかげに腰を動かすが、両手を掴んで強引に止めさせる。くいくいと、まるで馬を制御するように目の前の美女をコントロールする。

「あつ……くっ……本当に意地悪……んんっ」

焦らされたせいか、美冬さんの綺麗な背中に汗が滲みだしてくる。

「んっ……う、オチンポ、雄一くんが大きくて嬉しいオチンポが私の一番奥に来てるっ！」

「はい、よくできました」



「あつ、くつ、んんん、あああつ！」
 「腰表とはかりに、今までよりも速く喉を動かす。ばばばばんと肉がぶつかると音と、美冬さんの喘ぎが合奏して僕の耳を淫靡にくすぐってくる。音だけじゃなく、目の前でうなる美冬さんの背中と、背中越しにも分かるくらい揺れている美冬さんの巨乳が目も染ませる。そしてもちろん、美冬さんの中にみっちり埋まっている僕のペニスも、言い表しようのない気持ちよさに包まれている。まるで美冬さんの中で溶けて一つになつたかのように、抽挿のたびにがちがちの股間が湧けるような快感が腰から広がる。
 「あんっ、あつ、凄いい、気持ちいい、雄一くん、雄一くんっ、あううっ、あううっ、美冬さんの悦びの音が、僕の部屋に響き渡る。切なげに僕を呼ぶ声に聴えて、さらに強く速く突き入れる。ぐじぐじじゅに滑けた美冬さんの中は、息子のピストンを全力で受け止めて、愛おしそうに縮みつく。
 「僕も、気持ちいいですよ美冬さん！美冬さんのオマンコ、最高です！」
 「あつ、んっ、嬉しっ、ひあつ、あつ、あああつ！」
 「美冬さんの中が溶けだしてくる。熱々になつた中で、二回目の射精をねだつてちゅうちゅうと吸いついてくる。「香臭も、僕の精子を受け入れよう」と慕っている。濃縮された快感が男として、愛しあう家族としてそれに聴えてあげなければいけない。濃縮された快感が

竿の中を駆け上り、手綱を引くように美冬さんの両手を強く掴みあげる。
 「オマンコに、美冬さんのオマンコの中に僕の精子を出しますよ！」
 「うん、んっ、出して！雄一くんの精子、いっぱい出してっ！」
 「喘ぎとおねだりが等分に混じつた声をあげて、美冬さんの背中がくっつと反る。「へそとお尻が繋がるくらいに突き上げながら、美冬さんの耳元へと口を寄せる。
 「美冬さん、愛してますよ。」
 「っ！んんんんんんんんっ！イッくうううううううっ！」
 「僕の喘ぎを聞いた瞬間、美冬さんの中が今まで一番強く締め付ける。ペニス全てを握きしめるような抱擁に、僕の限界もあっさり訪れる。
 「くっ、あつ、ううっ！」
 「あうっ、んんっ、あつ、出てるっ、雄一くんが出てっ！」
 「絶頂に賣えるオマンコの中に、僕の快感の証をたっぷりと吐き出す。びゅるびゅると叩きつけるような勢いの射精を、美冬さんが嬉しそうに嚙み込んで飲み込む。
 「あうっ、んっ、ふう……」
 「押しつけながら、竿の中の一滴も残さずに吐き出す。二度めとは思えないほど勢いのある射精のたびに、美冬さんの中もびくびくと震えて悦びを返してくる。
 「ふっ……うっ。美冬さん、気持ちよかったですよ。」

「んんっ……嬉しい……」
 最後の一滴まで搾り出して、残滓を搾り付けのように奥をこねる。上半身を突っ伏した美冬さんは、突きたしたお尻を揺らしてそれに聴えてくれる。
 「あつ……」
 「半萎えになつたペニスをゆっくりと抜くと、美冬さんが殺しげな声を漏らす。だが、起き抜けに三発は精力を増強した僕でもきつい。それに、そろそろお尻も減ってきた。ちらりと美冬さんを見ると、まだ全身を棕色に火照らせたまま、余韻に浸っている。股間からは、溢れだした僕の精液がとろりと垂れ落ちている。
 「さすがに、この状態で朝ご飯をねだるのは酷だろう。気持ちよくさせてもらったけどだし、今日は自分で用意するとしてよ。」
 「美冬さん、僕は下に降りて、飯食べてますね。美冬さんはゆっくりしててください。落ち着いたら降りてきてくれますか？」
 「ん……はい、分かったわ……んん、ちゅっ」
 うつとりとした目で僕を見ている美冬さんにキスをしてから、服を着る。そうすると、思いついたかのように腹が鳴る。
 「さつ、とりあえず朝ご飯だ。」

「夏希、秋葉、おはよう」
 下に降りると、僕の家族である二人の義妹が先に二飯を食べていた。今日は予備校のないう僕とは違い、学校の制服を着ている。
 「朝に朝気が出てくる夏希と、その妹でこちらは対面的に大人しそうな容姿の秋葉だ。ただ、夏希はもとより秋葉もその身体が大人しいスタイルではないのは開々まで知っている。……おはよう、おはよう、お兄ちゃん」
 「……おはよう、お兄ちゃん」
 いつもは開々から挨拶を返してこたえる夏希も、内気ながらも最近はずっかりと返事をしてくれる秋葉も、どことなくじつじつとした視線でこちらを見ている。
 「どうしたんだ、二人とも、体調でも悪いのか？」
 「兄さん、それ本気で言ってる？」
 「トーストを飲み込んだ夏希が視線をさらに湿らせて僕を見る。
 「両、丸顔」ええ、それにあんなに長い間ママが上から降りてこない意味が分からないほど、バカじゃないし」
 「あ……」

「気まずげに頬を掻く。秋葉の方を見やると、これも小さく頷く。夏希の言うとおり、二人にはバレバレだ。たつたようだ。」

「別に兄さんが誰ぞセックスしようがいいんだけどさ。でも、今日ってママの番だっけ？」

「夏希……」

「不機嫌さを隠さない声で夏希が言う。これも痛い指摘だ。家族のコミュニケーションである身体の触れ合いには基盤上、その日の当番を決めている。ただ、それが他の家族と一緒にいるときに始れたりとか、あるいは当番自身が誘ったりと大体が複数でのプレイになつていてうややになつていくことが多い。」

「とはいえ、そこは彼女たち同士で暗黙の了解があるらしく、その日の最初に手を出すのは当番の人であるとか、その日の主導権は当番の人が握るとか、そういう部分で折り合いをつけているらしいというのは僕も感づいている。」

「そして今日の当番は美冬さんではなく、秋葉だ。たはずだ。見れば、普段は大人しい秋葉もほんの少し眉根を寄せて朝ご飯を食べている。」

「これ、中途半端な有め方では逆効果だろう。」

「ごめんごめん、当番のことを忘れてるつもりはないんだけどさ。美冬さんがあんまり綺麗なんもんだから我慢が利かなくなつたんだ。ほら、二人の母親だけあつて美冬さんは魅力的だから。」

「それは分かるけど……」

「いくぶんか不満が相らいたようだけど、まだ消えてはいない。なので、本命の言葉を続ける。」

「だからさ、今日は夏希と秋葉、一人ずつ愛しあおう。二人が満足するまで、付き合うよ。」

「兄さん、それ本当？」

「食い気味に夏希が反応する。秋葉も目を輝かせてこちらを見ている。効果があるとは思つたが、こんなに興奮だとは思わなくて少々たじろいでしまう。」

「あ、ああ、約束するよ。学校から帰ってきたら、それぞれ付き合つてあげるから、順番を決めておきなよ。」

「順番なんて……私、今日学校休むわ！」

「夏希、それは駄目！」

「勢い込んで立ち上がった夏希を、強く押し止める。また夏希の顔に不満が浮かび、そんな義妹にはゆくりと近寄る。」

「今日は休みだけ、僕だって予備校のある日に夏希や秋葉を抱きたいと思つても我慢して来たから、春期だつて仕事はちゃんとしてるだろう？ 学校や仕事をちゃんとしてから、愛しあおうよ。」

「でも……ママは……」

「それは分かるけど……」

「いくぶんか不満が相らいたようだけど、まだ消えてはいない。なので、本命の言葉を続ける。」

「だからさ、今日は夏希と秋葉、一人ずつ愛しあおう。二人が満足するまで、付き合うよ。」

「兄さん、それ本当？」

「食い気味に夏希が反応する。秋葉も目を輝かせてこちらを見ている。効果があるとは思つたが、こんなに興奮だとは思わなくて少々たじろいでしまう。」

「あ、ああ、約束するよ。学校から帰ってきたら、それぞれ付き合つてあげるから、順番を決めておきなよ。」

「順番なんて……私、今日学校休むわ！」

「夏希、それは駄目！」

「勢い込んで立ち上がった夏希を、強く押し止める。また夏希の顔に不満が浮かび、そんな義妹にはゆくりと近寄る。」

「今日は休みだけ、僕だって予備校のある日に夏希や秋葉を抱きたいと思つても我慢して来たから、春期だつて仕事はちゃんとしてるだろう？ 学校や仕事をちゃんとしてから、愛しあおうよ。」

「でも……ママは……」

「女おも不満げに喉に手を置いて、眼を合わせる。」

「うん。だから今日はもう美冬さんはおしまい。そのぶんの時間を二人に使うよ。それでいいだろう？」

「お姉ちゃん、お兄ちゃんの言うとおりでと思う……」

「秋葉……」

「なにかを言いかけた夏希が、秋葉の目を見て口を閉ざす。今日の当番は秋葉であるし、なによりも一目で分かるくらい情欲に潤んでいる秋葉がそう言っているのなら、夏希もこれ以上食いがれない。」

「そのあたり、出会った頃は我が強かった夏希が家族の和を尊重してくれているのも、こうして家族同士のコミュニケーションを続けているお陰でもある。」

「でも確かに、僕も我慢せずにやつちやつちたのは悪かったと思つてる。だからさ、これはお詫ひのしるし。」

「兄さん、んむっ！」

「視線を戻した夏希の唇を惹き、抱き寄せる。美冬さんに劣らず大きな胸が刺激感に僕の胸板で濡れ、まらかさを伝えてくる。そのまま、舌を差し入れると夏希も応えて口の中で淫らにダンスを踊る。」

「んっ、ふっ、んんっ、んんっ」

「僕の唾液を流し込み、夏希の唾液を吸る。朝のデイブキスはさつきまで食べていたトリストの味がした。」

「んんっ、ふっ、あつ……」

「しばらく義妹の口を味わつてから、ゆっゆりと身体を離す。頬を火照らせた夏希が、薄けた視線をむつりと絡ませてくる。」

「ほら、秋葉も、おいで。」

「あ、お兄ちゃん……んんっ」

「次いで秋葉を呼び寄せて抱きしめる。夏希とはまた違った柔らかさを全身で堪能しながら、唇を重ねる。」

「んん、ふっ、んん……んんっ」

「こっちは紅茶だろうか？ 夏希とは違っておらずと差し出された小さな舌を絡め取りながら、香りと味のついた唾液を飲み込む。」

「んっ……ちゅっ」

「吸いついてくる柔らかな唇を、名残惜しいけれども身体ごと離す。秋葉も夏希と同じように、潤みきつた瞳で僕を見る。」

「やっぱり、今日休んじやだめ……」

「夏希……」